慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Haydn像の変遷
Sub Title	Zur Verwandlung des Haydn-Bildes
Author	中野, 博詞(Nakano, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1970
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.29, (1970. 5) ,p.72- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	美学美術史特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00290001-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Haydn 像の変遷

中野博詞

長いあいだ謎につつまれていた、Franz Joseph Haydn（一七三二―一八〇九）の音楽像が、現代に真の姿を開示しはじめた。一九四〇年代から、Haydn 学者たちによって提唱されてきた Haydn ルネッサンスの運動が着実な成果をあげ、近年ヨーロッパ楽壇に Haydn 旋風をまきおこしつつある。一九四〇年以前の一般の演奏会では、Haydn の莫大な作品群のおよそ一割にあたる、晩年のかぎられた作品のみがとりあげられていたにすぎなかった。各地の音楽祭で未知の歌劇が毎年のように脚光をあび、素朴な初期の作品や強い感情表出につらぬかれた中期の曲も好んでとりあげられ、教会音楽家としても真価を認められるにいたった今日の姿と比較するとき、近年の Haydn ルネッサンスの輝かしい開花を理解しえるであろう。

Haydn 音楽の再興をもたらしたのは、Haydn 学者たちのひたむきな努力にほかならない。Haydn ルネッサンスの歴史は、現代 Haydn 研究の歩みをそのまま物語っている。Haydn 資料研究の其礎をきずきあげた、J. P. Larsen の労作[1]が公刊されたのは、一九三九年であった。一九五五年には、世界中に散在する Haydn の楽譜に対する学問的研究をとおして、Haydn 音楽を真の姿で再現しようとする初の本格的な Haydn 全集[2]が、ケルンの Joseph Haydn-Institut が着手しはじめた。W. A. Mozart 作品における Köchel 目録[3]に相当する、Haydn 作品に関するはじめての体系的目録は、一九五七年に A. v. Hoboken によって第一部[4]が完成された。伝記

研究にとって、必須な資料と目される Haydn の書簡集[5]も、一九五九年にいたってやっと刊行されたほどである。一九六〇年代に入って、二種の Haydn 研究誌[6]が発刊された事実は、Haydn 研究の急速な進歩の一端をしめしているといえよう。

Haydn 研究は、何故これほどまでに遅れていたのだろうか。おなし古典派時代に活躍した Mozart、あるいは L. v. Beethoven に対する研究と比較するとき、その後進性を再認識せずにはいられない。書簡に例をとってみても、Mozart, Beethoven ともに、最初の書簡集は[7] Haydn よりもおよそ一〇〇年はやい一八六五年に刊行されている。また作品全集においては、不完全であるとはいえ、最初の全集が Mozart に関しては一八七六年から八六年にかけて九六巻[8]、Beethoven に関しては一八六四年から六七年にかけて三一巻が刊行されている。しかし、Haydn に関しては一九〇八年になってから着手され、一九三三年までに一一冊を刊行したのみで中絶している。[9][10]

現代におけるもっとも基本的な Haydn 伝を一九三二年以来たびたび書きあらためている K. Geiringer は、Haydn 研究の後進性の原因として、Haydn 研究によこたわる多大な障害をあげている。[11][12] 一般に注文に応じて作曲する、古典派時代の音楽事情を反映するかのように、Haydn は当時のあらゆる楽種にわたって莫大な作品を残している。Haydn が手をそめた楽種は三四種類にのぼり、交響曲だけでも一〇六曲をもかぞえるほどである。しかも、Haydn は自分の作品に作品番号をつけておらず、自分の作品を整理するために二種類の作品目録を作製しているとはいえ、一部が消失したり、他の作曲家の作品があやまって加えられているなど、完全なものではない。また、Haydn の作品であることを実証するのに重要な手がかりとなる自筆楽譜が保存されている作品は少なく、大半の作品は同時代の筆写楽譜や印刷楽譜によって伝承されているのである。しかも、Haydn の作品としてつたえられてきた作品のなかに、数多くの贋作が含まれている事実は、Haydn 研究をいっそう困難なものとしている。[13][14]

生涯と作品に関する十分な資料が保存されている Mozart。作品に自身の作品番号を記すとともに、生前から作品全集が計画されていたとつたえられる Beethoven。両者と比較するとき、決定的な資料にかける Haydn 研究は、たしかにきわめて困難な分野といわなければならない。しかし、Haydn 研究の後進性は、単に問題の複雑さにのみ起因していたのであろうか。本稿では、Joseph Haydn-Institut に属する F. Blume[15] と G. Feder[16] の最新の研究を手がかりとして、Haydn 像の変遷をたどりながら、現代 Haydn

研究の現状を概観してみたい。

Haydn の音楽活動は、古典派時代における音楽家生活の縮図をえがいているともいえよう。一七三二年から一八〇九年にかけて、七七年間にわたってくりひろげられた生涯は、一八世紀中葉から一九世紀初頭にいたる音楽史上の古典派時代をすっぽりとおおっている。教会の合唱童児、街の音楽家から小貴族のおかかえ楽士に成長する青年時代、ハンガリーの大貴族 Esterházy 家の楽長としての三〇年間、大作曲家の名声につつまれる晩年。Haydn が歩んだ道は、当時の音楽家がたどる典型的な生き方であった。とくに、Haydn 音楽を織りなす多彩な様式変遷が、Haydn をとりかこむ雇用主をはじめ、貴族、教会、出版社、演奏団体など、注文主の音楽趣味につよく規定されていたことが注目されなければならない。(17)

事実、Haydn は古典派時代における最も人気があった作曲家である。Hoboken の印刷楽譜の研究(4)によれば、当時、Haydn のおよそ六〇〇にのぼる作品が、じつに一二五の出版社から刊行されていたとつたえられる。しかも、大半の作品は、種じゅの出版社によって、くり返し出版されていたのである。また、本来、交響曲として作曲された〈交響曲　第九四番　ト長調　びっくり Hob. I. 94〉が、声楽曲への編曲をもふくむ一八通りの編成で出版されているように、同一曲が様ざまな楽器編成で出版された事実も、Haydn のすさまじい人気を物語っている。一方、Joseph Haydn-Institut による当時の Haydn 楽譜の分布状況に関する調査(18)は、Haydn 音楽がヨーロッパ各国はもとより、アメリカをも征服していた興味ぶかい事実を明らかにしている。Haydn 時代の筆写楽譜と印刷楽譜は、ヨーロッパにおいてはマドリードからレニングラードにわたって、またアメリカのシカゴにおいても発掘されている。古典派時代はもとより、音楽史上これほど数多くの楽譜が出版された作曲家は、他に例をみないであろう。

死後においても、Haydn の人気がますます高まっていった事実は、一九世紀初頭にきそって出版された数かずの伝記からも推測しえよう。Haydn の最初期の伝記としては、生前から Haydn と親交があった、ザクセンの外交官 G. A. Griesinger(19) と画家 A. C. Dies(20) が、ともに一八一〇年に出版した二冊がとくに注目される。晩年の Haydn との談話をもとに書かれた二冊の伝記は、歴史的にきわめ

て高く評価されなければならないとはいえ、当時の習慣にしたがって、著しく逸話的にまた伝説的に粉飾されている点が強調されなければならない。今日、一般に流布されている Haydn の逸話の大半は、両書に由来している。

さらに、一八〇九年には G. S. Mayer[21]、一八一二年には G. Carpani[22] がイタリアで、また一八一四年には M. H. B. Stendhal[23] がフランスで Haydn 伝を出版している。その他にも、同時代人の記述は、雑誌、事典などに数多く見出だされる。近年の Hoboken[24] と V. Gotwals[25] の研究によって、これらの初期の伝記には無数の食違があるとともに、事実を曲解した記述が目立つことが指適されている。しかし、むしろ注目すべきは、最近まで保ちつづけられてきた、パパ Haydn の愛称に代表されるユーモラスな逸話にいろどられた Haydn 像が、初期の伝記作者たちによって生みだされたことであろう。戯画化しているともいえる、この Haydn 像こそ、Haydn の音楽的生涯をゆがめて後世につたえ、一九世紀から近年にいたるまでの長い Haydn 音楽の衰退を導きだした源泉である、とはいえないだろうか。

一八二〇年代にいたると、Haydn 像の後退がはじまる。Beethoven が作曲家たちの指導像となり、Mozart がロマン主義者たちの寵児となった当時の楽壇をふりかえるとき、Haydn 音楽の衰退を音楽趣味と音楽生活の変化に帰する Blume の見解[26]は、肯定されなければならない。F. Schubert にはじまるロマン派の交響曲を考察してみても、主題の展開を中心とした Haydn 様式よりも、主題の対比と並列を特色とする Mozazt 様式が愛好されており、単に技法的側面にかぎれば、主題労作をはじめとする Haydn の努力は、Beethoven のうちにより進んだ姿となって見出だされる。古典的調和美に挑戦をいどんだロマン主義者たちにとっては、Haydn 音楽はまさに時代おくれの陳腐な音楽に映じたにちがいない。

Haydn 音楽に独自の美を見出だしえなかったロマン派においては、Haydn は、Mozart と Beethoven の音楽を生みだした父親的存在であったにすぎなかった。パパ Haydn の愛称は、けっして肯定的な意味ではなく、旧式な音楽像への侮蔑な眼差をもって空虚に用いられていたのである。このようなロマン派的音楽観が生みだした、音楽史上における Haydn の位置づけが、近年まで保たれてい

た事実がとくに留意されなければならない。

学問的研究にもとずく初の Haydn 伝が、C. F. Pohl[27] によって完成されたのは一八八二年である。前述の一九世紀初頭の伝記をはじめ、Pohl 以前のあらゆる研究を参照するとともに、Haydn と縁のふかい Esterházy 家に保存されている楽譜や文書を中心に、当時において可能なかぎりのあらゆる資料を調査し、Haydn の死後七〇数年にして、逸話と伝説の粉飾をはらった Haydn 像のかなり正確な全貌を世に示したのであった。勿論、Pohl の研究には、現在の Haydn 研究の段階から見れば、作品の真偽問題をはじめ数多くの誤りを指摘しえる。しかし、現在においても Haydn の基本的文献として高く評価されているように、Pohl の労作は Haydn 研究に貴重な一歩をしるす結果となった。

Pohl の努力をもってしても、ロマン主義的 Haydn 軽視の風潮をたやすく打破しえなかったとはいえ、一九世紀末から今世紀の初頭にかけて、前古典派音楽研究[28]の勃興とともに、Haydn 音楽再興への気運が徐じょにたかまっていった。A. Sandberger[29] の研究を先頭に数かずの特殊研究が登場するが、二〇世紀初頭の最大の成果は、Pohl の研究を基礎に、Mandyczewsky が中心となって、一九〇八年に開始された最初の Haydn 全集[10]であろう。しかし、二六年間に一一冊を出版したにとどまった事実からも推察されるように、今世紀初頭の Haydn 研究は、未整理の莫大な資料にとまどっていた感じがつよい。

一九世紀的 Haydn 像を打破して、古典派時代に生きた Haydn の真の音楽像を再現しようとする本格的な Haydn ルネッサンスは、現存する Haydn 資料の徹底的な研究が着手される一九三〇年代にはじまったといってよい。一九三二年には Pohl の研究にもとずきながらも、資料に対する実証的研究をつうじて、古典派時代の背景のうちに Haydn 像をとらえた、現代のもっとも優れた Haydn 伝が Geiringer[11] によって出版された。一方、Larsen は、現存する Haydn 楽譜の詳細な調査をとおして、Haydn 作品の真偽問題、作品の成立年代をはじめ、現代 Haydn 研究への先鞭をつけた画期的な資料研究を一九三九年[1]と一九四一年[14]に発表した。これらの基礎的研究をもとに、広範な地域にわたる学術調査が可能となった第二次大戦の終戦を境として、世界中の Haydn 学者の協力による、莫

大な Haydn 資料の体系的開発がはじまった。とくに、従来ほとんど手がつけられていなかったチェコスロバキアをはじめとする東欧圏の開発は、Pohl や Larsen の時代にはまったく知られていなかった、数多くの Haydn 資料を発掘する結果となった。[18] 世界中の修道院、貴族の文庫、図書館、出版社、演奏団体、個人の蔵書から蒐集された Haydn に関する楽譜、作品目録、書簡、プログラム、広告などの資料の数は、現在 Joseph Haydn-Institut に蒐集されているだけでも、二二五〇〇〇をこえるマイクロ・フィルムを数えるほどである。これらの新たに発掘された莫大な Haydn 資料の調査と整理の段階が、現代 Haydn 研究の現状である。Haydn の作品数すら、適確に決定しえる学者が一人もいないように、現代の新しい Haydn 像はまだ確立されていない。しかし、着実な資料研究は、従来の Haydn 認識に数多くの誤りを見出だし、一九世紀的偏見を変革しながら、真の Haydn 像を一歩一歩きずきあげている。

現代 Haydn 研究の成果は、新作品の発掘、作品の真偽問題、作曲年代の推定にまず見出だされる。一九六一年の O. Pulkert による〈チェロ協奏曲 ハ長調 Hob. VIIb. 1〉の発見。[30] 一九六二年には、Feder が二曲の変ホ長調のクラヴィール・ソナタをチェコスロバキアで発掘している。[31] その他にも、E. F. Schmid, R. Landon, I. Becker-Gluch, H. Heusner などによって、数かずの新発見がなされている。[32]

作品の真偽問題は、Haydn 研究のもっとも困難な分野として、つねに議論の中心となってきた。現在、一応一〇六曲とされている交響曲数の変遷は、この間の事情を端的に物語っている。最初期の伝記作家 Dies は、[20] Haydn 自身が計画し、一八〇五年に写譜家 J. Elssler によって作製された Elssler-Haydn 目録にしたがって、[14] Haydn 交響曲を一一八曲とさだめた。しかし、一九世紀末には、L. Schmidt によって一四四曲に、A. Wotquenne によって一四九曲に、W. H. Hadow によって一五三曲に増大された。[33] 一九〇八年、Mandyczewsky は Pohl の研究を基礎に、最近まで一般に信じられていた一〇四曲を選定した。しかし、一九三〇年代に入ると、Sandberger が[34] 一八二曲を主張し、Larsen との間に論争が展開されている。さらに、さまざまな論義をへたのちに、一九五五年の

R. Landon の詳細な資料研究[35]によって、Mandyczewsky の一〇四曲に新たに確定された二曲をくわえた、現在の一〇六曲が定説化された。

従来の真偽決定が、Haydn 時代の不正確な作品目録や伝説をたよりに、様式研究を中心に行なわれてきたのに対し、現代の Haydn 研究は、徹底した資料研究から真偽問題にたちむかっている。交響曲において Landon がなした成果と同様な研究は、長いあいだ Haydn の作品として愛好されてきた〈おもちゃ交響曲 Hob. II 47[36]〉や、有名な〈セレナード〉をふくむ〈弦楽四重奏曲 作品三 Hob. III. 13–18〉[37]が、贋作であることを実証した種じゅの研究となってあらわれている。

後世にのこされた自筆楽譜がきわめて少なく、出版社が多くの場合 Haydn の意向を無視して作品を配列したために、Haydn 作品の成立年代の推定はきわめて困難である。様式研究をたよりとした二〇世紀初頭までの研究は、この面においても多くの誤りをおかしている。Haydn と出版社のあいだに交された書簡[38]、当時の演奏会のプログラムをはじめとする資料研究、さらに自筆楽譜と筆写楽譜における書法[39]や印刷楽譜の版番号[4]などを考察する、楽譜研究を中心に行なう現代の研究は、作曲年代の推定にも新たな光をなげかけている。交響曲における Landon[35]、クラヴィール・ソナタにおける Feder[40]、弦楽四重奏曲における L. Somfai[41]の研究は、変化にとむ Haydn 音楽様式の変遷を浮きぼりにしている。

Haydn 音楽を正しい姿で現代に再現する試みは、Joseph Haydn-Institut の学問的校訂楽譜[2]の作製によって、着ちゃくとすすめられている。従来使用されてきた印刷楽譜は、一般に資料考証をせずに出版された一九世紀の印刷楽譜をモデルとして作製されたものである。それだけに、自筆楽譜と比較すると、音符からオーケストレーションにいたるまで、無数の誤りを含んでいる。

一曲に関しても数十種類をかぞえる Haydn 時代の莫大な楽譜は、下記の九種類に分類しえる。(一) 自筆楽譜、(二) Haydn の加筆をもつ筆写楽譜、(三) Haydn と密接な関係にあった写譜家による筆写楽譜、(四) ウィーンの職業的写譜家による筆写楽譜、(五) Haydn が活躍していた地域から遠くはなれた地方で作製された筆写楽譜、(六) Haydn の自筆楽譜にもとずくか、Haydn 自身によ

って校訂されたオリジナルな印刷楽譜、（七）良質の筆写楽譜による印刷楽譜、（八）価値の低い筆写楽譜から作製された印刷楽譜、（九）すでに出版された印刷楽譜の海賊版。

Joseph Haydn-Institut の校訂方法は、楽譜の価値づけにはじまり、自筆楽譜のほかに良質の筆写楽譜と信頼しえる印刷楽譜を数種類選定し、詳細な比較研究をおこなった結果、Haydn の記譜法にしたがって、Haydn 楽譜の正しい姿を再現するのである。Joseph Haydn-Institut の校訂楽譜と従来の楽譜を比較するとき、同一曲がまったく異なって響くことに驚かずにはいられない。従来の印刷楽譜は、一九世紀的音楽趣味によって Haydn の音響像をゆがめていたとともに、Haydn 特有の魅力をうばいさっていた事実が強調されなければならない。

伝記に関する研究の進歩も、ユーモラスな逸話にいろどられた Haydn 像から、人間 Haydn の赤裸らな姿を引きだしつつある。すでに完全な書簡集が出版された今日、Haydn と縁のふかかった Esterházy 家に保存されている文書[42]、さらに出版社、演奏団体の目録や文書に調査がすすめられている。なかでも、G. Thomas, H. Walter[43] などによる[44]、晩年のオラトリオの台本作者であった G. v. Swieten と Haydn の関係に対する研究は、Haydn の創作態度を開示するものとして注目される。単なる伝説上の人物としてではなく、Haydn の生涯のうちに、古典派時代の音楽家の生活を客観的に把握しようとするのが、現代の伝記研究の傾向といえよう。

古典派時代の音楽様式の変遷を体現していると目される Haydn の音楽像は、同時代の作曲家たちとの影響関係に関する研究によって、一層明白にされつつある。近年の研究では、わずかにウィーンで活躍したボヘミアの作曲家たち[45]、I. Pleyel[46], Koželuch[47] などの研究が発表されているにすぎない。Haydn 自身がふかく傾倒していた C. P. E. Bach, Haydn のシュトゥルム・ウント・ドランク時代の鍵をにぎると考えられる C. W. Gluck、さらに Mozart や Beethoven との関係をはじめ、同時代の作曲家たちに対する研究が今後の課題となるであろう。

現代の Haydn 研究が個別研究にとどまっているように、新しい Haydn 像はまだ完成されていない。しかし、音楽史の各時代に独

自の音楽美を探求しようとする現代の音楽史観のもとに、音楽学者と演奏家の協力によって、長いあいだ忘れられていた、なんと多くの Haydn 作品が現代に再興されたことであろうか。新しい Haydn 像の創造は、まだ数多くの困難な課題をかかえている。G. Feder は、二五年後に Haydn 全集が完結された時に、はじめて総括的な Haydn 研究をなしえると語っている。新しい Haydn 像の完成は、同時に古典派音楽史を書きかえることにちがいない。過去の音楽遺産を現代に正しく再現し、現代の客観的な視点から新しい価値づけをしなければならない、との現代音楽学にかせられた課題は、Haydn 研究にもそのまま妥当するといえよう。

（一九七〇、三、五）

註（1） P. Larsen: Die Haydn-Überlieferung, 1939.

（2） Joseph Haydn-Institut: Joseph Haydn Werke, 1958.

（3） L. Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadeus Mozarts, 1862.

（4） A. v. Hoboken: Joseph Haydn. Thematisch-bibliographisches Werkverzeichnis, Bd. I, 1957.

（5） R. Landon: The Collected Correspondence and London Notebooks of Joseph Haydn, 1959. D. Bartha: Joseph Haydn. Gesammelte Briefe und Aufzeichnungen, 1965.

（6） R. Landon: Haydn-Yearbook, 1962～ . G. Feder: Haydn-Studien, 1965～ .

（7） Mayr: Mozart's Briefe, 1865. L. Nohl: Beethovens Briefe, 1865.

（8） Breitkopf und Härtel: Wolfgang Amadeus Mozarts Werke, Bde. 96, 1876-86.

（9） Breitkopf und Härtel: Ludwig van Beethovens Werke, Bde. 31, 1864～67.

（10） Breitkopf und Härtel: Joseph Haydn Werke, Bde. 11, 1908-33.

（11） K. Geiringer: Joseph Haydn, 1932. Haydn, 1946, Joseph Haydn 1959.

（12） K. Geiringer: Haydn, 1946, p. 179～187.

（13） Joseph Haydn-Institut の分類にしたがった。

（14） P. Larsen: Drei Haydn Kataloge in Faksimile, 1941.

(15) F. Blume: Gibt es ein neues Haydn-Bild? (in: Musica), 1969.
(16) G. Feder: Lo Stato Attuale degli Studi su Haydn (in: Nuova Rivista musicale Italiana), 1968.
(17) 拙稿: ハイドン, 一九六八.
(18) G. Feder: Die Überlieferung und Verbreitung der handschriftlichen Quellen zu Haydns Werken (in: Haydn-Studien), 1965.
(19) A: Griesinger: Biographische Notizen über Joseph Haydn, 1810.
(20) C: Dies: Biographische Nachrichten von Joseph Haydn, 1810.
(21) S. Mayer: Brevi notize istoriche della vita e delle opere di Giuseppe Haydn, 1809.
(22) G. Carpani: Le Haydine, 1812.
(23) B. Stendhal: Lettres écrites de Vienna en Autriche sur le célèbre compositeur Joseph Haydn, 1814.
(24) A. v. Hoboken: Discrepancies in Haydn Biographies, 1962.
(25) V. Gotwals: Joseph Haydn. Eighteenth-Century Gentleman and Genius, 1963.
(26) F. Blume: Ibid., s. 334.
(27) F. Pohl: Joseph Haydn Bd. I, 1875, Bd. II, 1882.
(28) 拙稿: 古典派研究に関する諸問題 (哲学第53集), 一九六八.
(29) A. Sandberger: Zur Geschichte des Haydnschen Streichquartetts (in: Altbayrische Monatshefte), 1899.
(30) O. Pulkert: J. Haydn, Koncert C Dur, 1962.
(31) G. Feder: Zwei Haydn zugeschriebene Klaviersonaten (in: Bericht über den internationalen musikwissenschaftlichen Kongress), 1962.
(32) G. Feder: Haydn-Entdeckungen (in: Musica), 1965.
(33) K. Geiringer: Haydn, 1946, p. 179～180.
(34) A. Sandberger: Zu Haydns Repertoire in Eisenstadt und Esterház (in: Jahrbuch Musikbibliothek Peters) 1933.
(35) R. Landon: The Symphonies of Joseph Haydn, 1955.

(36) F. Schmidt: Mozart und die Kindersinfonie (in: Mozart-Jahrbuch) 1951. B. Aulisch: Haydns Kinder-Sinfonie (in: Das Liebhabers' Orchester) 1963.

(37) A. Tyson and R. Landon: Who composed Haydn's op. 3? (in: The Musical Times), 1964. L. Somfai: Zur Echtheitsfrage des Haydn'schen „Op. 3" (in: Haydn-Yearbook). 1965.

(38) H. Botstiber: Joseph Haydn und das Verlagshaus Artaria, 1909. H, v. Hase: Joseph Haydn und Breitkopf und Härtel, 1909.

(39) G. Feder: Zur Datierung Haydnscher Werke (in: A. v. Hoboken · Festschrift zum 75. Geburtstag), 1962. 拙稿: ヨーゼフ・ハイドン音楽の再興（フィルハーモニー 第三八巻 第一一号）一九六六

(40) G. Feder: Probleme einer Neuordnung der Klavier-Sonaten Haydns (in: F. Blume · Festschrift zum 70. Geburtstag.), 1963.

(41) L. Somfai: Die Entstehung des klassischen Quartettklanges in den Streichquartetten von Haydn (in: Zenetudományi Tanulmanyok Haydn Emlékére), 1960.

(42) J. Harich: Haydn Documenta I–II, (in: Haydn-yearbook), 1963～65.

(43) G. Thomas: Griesingers Briefe über Haydn (in: Haydn-Studien), 1966.

(44) H. Walter: G. v. Swietens handschriftliche Textbücher zur „Schöpfung" und zu den „Jahreszeiten" (in: Haydn-Studien), 1966.

(45) C. Schönbaum: Die Böhmischen Musiker in der Musikgeschichte Wiens vom Barock zur Romantik (in: Studien zur Musikwissenschaft), 1962.

(46) J. Klingenbeck: Ignaz Pleyel — sein Streichquartett (in: Festschrift E. Schenk), 1962.

(47) M. Poštolka: Haydn und Koželuch (in: Bericht über die internationale Konferenz zum Andenken Joseph Haydns), 1951.